# Pick_Up 大東大原水掛け祭り

### 冷水と熱気が織りなす極限のイベント

## 天下の奇祭に2万8500人が訪れる

冬の風物詩、「一関市・大東大原水掛け祭り」（同保存会主催）は2月11日、大東町大原地内で行われた。

今年は、地元の厄年男性ら134人、県内外から体験参加として186人の裸男たちが疾走。同地区内の八幡神社への大しめ縄奉納行進、芸能公演、蒸気ポンプ放水実演など多彩な催しが行われた。

祭りの起源は、明暦3年（1657年）に起きた江戸の大火。以来、火防を祈願し、呼びかける祭りとして受け継がれ、今年で360年の節目を迎えた。天下の奇祭を目に焼き付けようと、訪れた来場者の数は2万8500人。

裸男たちは、八幡神社で厄払いと火防を祈願。出発の合図を待ち、旗切りの合図とともに一斉に駆け出した。沿道からは、歓声と、大量の清め水が容赦なく掛けられる。

「大願成就」「安産祈願」「復興」など、それぞれの願いを背負った裸男たち。寒さを気合で吹き飛ばしながら、力強く商店街を駆け抜けた。

1_刺さるような冷水を浴びながら、厳寒の街道を疾走する／2_加勢人（かせっと）たちも走る ／3_消防団に制止され、出走を待つ ／4_肩を組んで山口川に入る裸男たち。「納め水」が容赦なく掛けられる／5_一関市・大東大原水掛け祭り360年と県指定無形民俗文化財指定を祝う「記念式典」は2月4日、大原市民センターで開かれた／6_水掛け祭りの起源は火災。大しめ縄奉納修祓式（しゅうばつしき）で厳かに火防と祭りの安全を祈願／7、8_祭りを盛り上げる大原小児童による獅山清流囃子と大原中生徒による出陣太鼓／9_防火の誓いを新たにする消防団／10_祭りを終えた街道は静けさを取り戻した



# あいな人 File_46
いちのせきを愛する人

地球緑化センター第24期緑のふるさと協力隊員

## 中芝 浩美さん

Nakashiba Hiromi　25　川崎町門崎

### 周りの人のために何ができるか考えながら生きていきたい

第24期緑のふるさと協力隊員として、川崎地域の門崎地区に赴任している浩美さん。「緑のふるさと協力隊」とは、農山村に興味を持つ若者が地方再生に取り組む地方自治体で1年間暮らし、地域密着型の活動に携わるプログラム。市内への同隊員の受け入れは7人目で、川崎地域では今回が初めてです。

浩美さんは、昨年4月から市内の民家を借りて一人暮らしをスタートさせました。一関への赴任を希望したのは、東北への憧れから。「北国の冬を体感してみたかった。協力隊員の受け入れが初めてのところなら、自分の活動次第で人間関係をつくっていける」と入隊を決意したそうです。

春の「メダカ田んぼのお田植え会」への参加に始まり、門崎地区に伝わる布佐（ふさ）神楽への挑戦、秋の農作業の手伝いや地域行事への参加など、精力的に活動してきました。赴任してから買い換えた長靴は5足を数えます。

「市内で一番小さい地域なのに、米、野菜、畜産、リンゴ、サクランボやイチゴなどのさまざまな農家がある。伝統芸能が引き継がれ、自然にも恵まれた個性豊かな場所」と川崎地域の魅力を語ります。

協力隊員の任期は3月15日までと残りわずか。「相手の懐に真正面から飛び込むことで、たくさんかわいがってもらえた。皆さんにいろんなことで支えてもらったり教えてもらったりした」と川崎での1年間を振り返ります。地域の人は「人柄の良さが浩美さんの一番の魅力。彼女のおかげで、普段行事に出てこない人でも参加してくれるようになった」と言い、赴任期間を終えた後の「浩美ロス」をどう克服するかで早くも頭を悩ませているとか。

「隊員として過ごした経験を生かして、周りの人のために何ができるかを考えながら生きていきたい」と前を見据える浩美さん。川崎地域の人たちへの感謝を胸に、次のステージへ歩みを進めていきます。

**Profile**

1992年岡山県真庭市生まれ。埼玉県立大学保健医療福祉学部卒。面白いことなら何でもやってみたくなる好奇心旺盛な性格の持ち主。学生時代、休学して105日をかけて地球一周した経験あり。好きな食べ物はチョコレート。身長147㌢。座右の銘は「今を生きる」。